

令和2年7月15日

基礎から分かる県内中世城館 ～お城にGO!～



鳥取県埋蔵文化財センター
課長補佐 中山 寧人

本日の内容



- 1 中世社会と中世城館について
 - ①鎌倉幕府の滅亡、南北朝の争乱、観応の擾乱
 - ②中世城館の変遷
 - ③中世の武士と戦い
- 2 中世の因幡の様子 ～若葉台地域付近を中心に～
 - ①私都城（市場城）と私都毛利氏
 - ②因幡の中世城館
- 3 おわりに

南北朝の争乱・観応の擾乱

鎌倉幕府滅亡・室町時代はじめ（約600年前）

〔鎌倉幕府滅亡〕

☞ 後醍醐天皇を中心に鎌倉幕府倒幕→鎌倉幕府滅亡

〔南北朝の争乱〕

☞ 後醍醐天皇と室町幕府将軍 足利尊氏の争い

→ 朝廷が南朝（後醍醐天皇派）と北朝（足利尊氏）となり争乱となる

〔観応の擾乱〕

☞ 室町幕府将軍 足利尊氏と弟 足利直義の争い

→ 幕府が二分され、全国的な争いとなる

中世城館・山城の誕生



☞ 鎌倉幕府倒幕・南北朝の争乱・観応の擾乱の後に爆発的に全国的で城が造られる

→ 急峻な山に造られる山城も多数
中には山岳寺院に山城を造る場合も

↑
戦うことより立て籠もることを重視

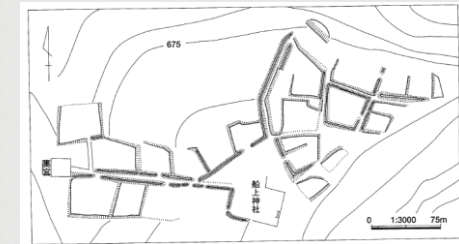
例) 史跡船上山行宮跡：寺院
千早城（大阪府）：籠城用の城

史跡船上山行宮跡



山岳仏教の聖地、後醍醐天皇が名和長年と3ヶ月立て籠もり、鎌倉幕府倒幕の気運をつくった。

史跡船上山行宮跡縄張り図



四角の区画は、僧坊跡であり、山城の施設ではない。

中世城館の変遷

- ⑧ 室町時代の前半（14世紀）
 - ・多くの山城は臨時的な施設
 - ←戦の時のみ山城に立て籠もる
 - ※だから発掘調査でも出土品が少ない
 - ・通常は山麓の館で生活
- ⑧ 室町時代後半（応仁の乱以降 15世紀～）
 - ・恒常的な施設として城館が機能
 - ・日常生活をするため、急峻な山以外にも築城
 - ※発掘調査での出土品も多い

応仁の乱

- ⑧ 八代将軍 足利義政の後継者をめぐり、弟 足利義視、子 足利義尚が争い、その結果、幕府重臣も巻き込んだ全国的な争乱（戦国時代の始まり）

← 足利義視派（東軍）：大将 細川勝元（管領）
足利義尚派（西軍）：大将 山名持豊（四職）（山名宗全）



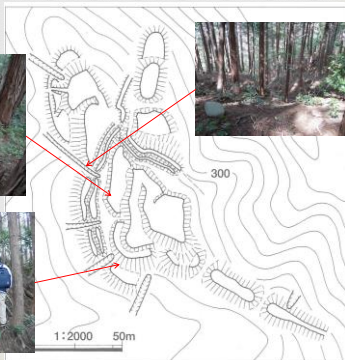
※因幡守護山名氏の宗家
↑
本拠地：但馬（出石）
← 此隅山城
※小山の山城

応仁の乱以後の中世城館

- ⑧ 恒常的に生活する城館 ← 防御施設の充実
〔防御施設〕
 - ・曲輪：自然地形を削平した平地
屋敷や防御施設を建てる場所
 - ・切岸：曲輪の端を絶壁にし、登れない崖にしたもの
 - ・堀（横堀・縦堀）：山の斜面に縦や横に掘りを掘った物
 - ・土塁：曲輪の端に土で土手を築いたもの
土塁の上には柵等を設置していた

城の施設の例

狗戸那城(鹿野町)



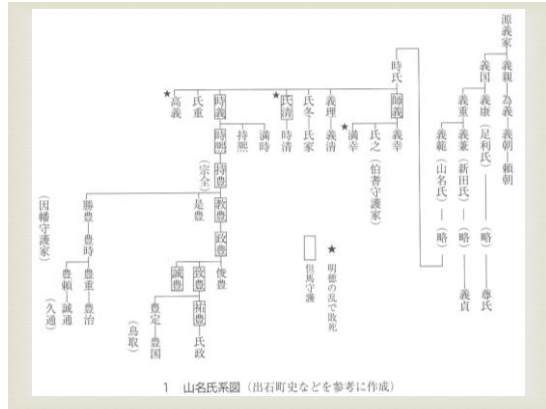
中世社会の武士

- ⑧ 室町時代の武士の種類
 - ・守護：幕府から任命される国の統治者
 - ・地頭：
 - ・奉公衆：室町幕府将軍の直属の家臣
 - ・守護代：守護が赴任国に不在の時の代理
 - ・国人：幕府の官職のない武士

例) 伯耆守護：山名氏
甲斐守護：武田氏（武田信玄）
安芸の国人：毛利氏（毛利元就）

中世の因幡の様子 15・16世紀（文明～永祿）

- ① 15世紀後半
 - 因幡国には奉公衆が多く、因幡守護と奉公衆の衝突が多発。
 - ・奉公衆：私部毛利氏（森氏）
若桜矢部氏 など
- ② 16世紀前半
 - 因幡山名一族内の紛争、尼子氏の侵攻、但馬山名氏との不仲により、天神山城付近で度々合戦が起こり、最終的に但馬山名氏により天神山は落城する。これより因幡守護は但馬山名系列になる。
- ③ 16世紀後半
 - 毛利氏と手を結んだ因幡国人武田氏の勢力拡大で因幡守護の支配力が弱まる。



天正年間 (16世紀後半)

OR [天正7年(1579)]
 南条元統、宇喜多直家が毛利方から織田方に寝返る
 → 織田方の影響力が一举に東伯耆まで広がる
 織田方の因幡・伯耆侵攻が本格化

[天正8・9年 因幡攻め]
 織田(羽柴秀吉) VS 毛利(吉川元春)
 勃発

※織田方の総大将: 羽柴秀吉 毛利方の総大将: 吉川元春

この戦いの中で私部城は毛利方から織田(羽柴秀吉)方へ

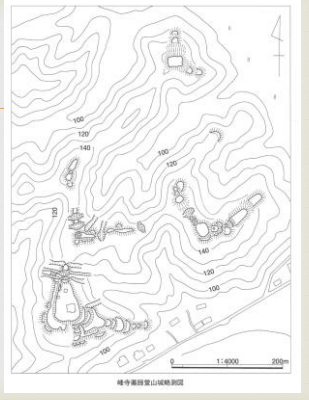


3

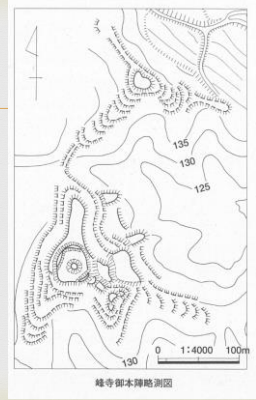
今までの話に関する山城



私都城近辺のお城
峰寺薬師堂山城



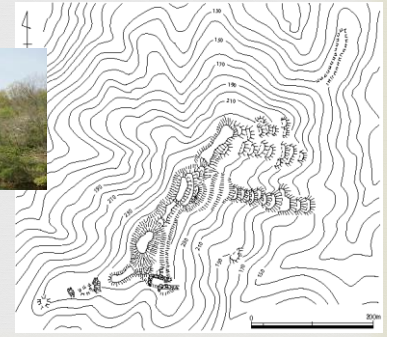
私都城近辺のお城
峰寺御本陣



鶴尾城



武田高信のお城



防已尾城



海上交通を押さえる海の城
大崎城

